

地域創生を巡る現下の問題

地域創生がうまくいかない。迷ったあげく思考停止に陥り、これまでの考え方から抜け出せない。なんとなく違和感をおぼえつつも、これまでのやり方に囚われる。そして各方面からの助言に翻弄され悪戦苦闘するが、とどのつまり疲弊を強めただけのことにしかならない。それは他人の忠告に振り回されたあげくに、最も大事なものを失う『ロバ売りの親子』の話にも似る。

その原因はどこにあるのだろうか。原因は二つ考えられる。一つは、これまで私たちが絶大な信頼を寄せてきた考え方と方法論にある。戦後の、この国の国土/都市をめぐる諸問題に着目し、大きく国づくりの時代、都市の時代、地域創生の時代に分けるなら、それは都市の時代に関係する。都市の時代とは、産業や人口が急増し、都市の空間や拠点を効率的につくり上げることが求められた。科学の論理や分析主義が標榜され、マスタープランや分業、主客分離が取り入れられた。それは輝かしい成果をもたらし、豊富な知見を築き上げた。

けれど時代が右肩下がりとなり、衰弱や衰退する地域の再生/創生が課題となるなか、都市の時代に築かれてきたものの見方や方法論では根本的な対処が厳しくなっている。簡単にいってしまえば、都市の時代は、旺盛な需要に対し供給していけばよかった。需要の増大に追われてはいたが、対処の方向は格段に見えやすかった。対して地域創生の時代になると、需要そのものが減少していくのだ。それに抗して、地域を維持しようとするれば、需要を創り出すほかない。小さなことの積み重ねが欠かせない。取組みが連鎖し広がっていくことが要諦となる。あるいは地域の生き方を変えるしかない。これまでとは対処の方向が違うのだ。にもかかわらず、その輝かしさに幻惑され、これまでのやり方をそのまま、無理に当てはめようとするところに、不如意が生じる。

もう一つは、地域創生の時代に対峙するものの見方/考え方が築かれていないことによる。思想といってもよかろう。何を抛り所として、衰弱する地域に向き合ったらよいのか、基軸のようなものがないのだ。比較的うまくいくと思われる断片ができあがっても、それを体系にしていかなければ、知見として積みあがっていかない。多くの事例ができたとしても、この国全体として、方法論として体系化されていないのだ。そのための基軸としての新たな思想が望まれるのだ。

このような原因から目をそらし、いつまでも地域の知恵・アイデアや本気度次第などとしていてはならない。それぞれの地域が勝手に自己流を目指さすほかないなどとしてはならない。地域づくりもまちづくりも、ビジネスと同列に考えてはいけない。ビジネスは、我がごとであり、失敗すれば自分で責任をとることができる。けれど地域は、そこに住み暮らす者たち全員のものである。いな、そこに想いを寄せる人たち、次の世代、そして大事に、大事に引き継いでくれた先人たちの賜物なのだ。誰かが責任をとって辞めれば済むというものではけっしてないのだ。

(高村 義晴)